

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（元鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	丹尾安典（早稲田大学文化構想学部教授）
西山純子（千葉市美術館学芸員）	三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
森 登（学藝書院）	樋口良一（版画堂）

戦前に版画を制作した作家たち (25)

【や前半】

八重垣逸郎 (やえがき・いつろう) 1913～没年不詳

1913 (大正 2) 年青森市に生まれる。洋画家。今純三門下の一人と思われる。1933 (昭和 8) 年頃から今の画室に出入りし、1936 年 12 月に今の自宅で開かれた「青森エッチングの夕」(12 日) や 1937 年 8 月に今を講師に招いて開催した青森県師範学校夏期図書講習会 (会場: 青森県師範学校図画教室) にも参加。戦前は第 23～28・30 回二科展 (1936～1941・43) に出品。版画は、関野準一郎の推薦で武井武雄主宰の「榛の会」の第 11 回 (1945) と第 12 回 (1946) に参加する。第 11 回附録『賀利版通信』第 19 号の「新会員紹介」によると、「青森市出身、国民学校教師、油絵は二科へ出品、版画は合羽、木版、銅版等」と記されている。また、第 12 回の時の住所は関野と同じ「杉並区高圓寺 3-18」で、「榛の会」への参加はこの 2 回のみ。戦後は 1955 年に野間仁根・鈴木信太郎・高岡徳太郎らが創設した「一陽会」に出品。1958 年第 4 回展で会友、1963 年第 9 回展で会員となる。2004 年当時は東京都杉並区に在住。【文献】『エッチング』50 / 江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979) / 市道と豊『奇跡の成立 榛の会昭和 21 年』(室町書房 2008) / 『賀利版通信』19 (『榛の会 第 11 回』1944.12) / 『一陽会五十年史』(三好企画 2004) (樋口)

八木澤英三 (やぎさわ・えいぞう) 生年不詳～1931

1929 (昭和 4) 年、横浜において八木澤英三・近藤雅平・福田信二の 3 人は版画同人誌『きくづ』(1929～1931) を創刊する。当時の版画同人誌では教師の集まりが多い中、『きくづ』の同人は会社社長をはじめ、会社員・医者・編集者などの職業を持つ今で云う「日曜版画家」たちで、例外的に版画家で英語教師の川上澄生も参加している。八木澤はその『きくづ』第 2 号 (1929.12) に《活動屋 [3 枚組]》ほか 2 点、第 3 号 (1930.1) に《風景》、第 6 号 (1930.4) に《街頭風景》を発表する。特別号『きくづ ALBUM』(1930) に《自画像》を、同じく特別号『羽子板及紙』(1930.1) では《正月風景》に木版摺りの小文を添えて発表。その後、版画の発表は途絶えた。第 2 巻 1 号 (1931.1) 一周年記念号には「目下病を得てわび住ひ、(中略) 早く快癒して独特のノミの味を見せてはくれまいか」と近藤が「同人近時片々」に八木澤の近況を寄せているが、この 1931 (昭和 6) 年に逝去する。その後の第 2 巻 3 号 (1931) は「八木澤英三追悼号」となり、同人の本多興花が追悼文「英三君の死を」を寄せている。そのほか、八木澤は中島重太郎主宰の創作版画倶楽部が発行した『版画 CLUB』第 2 年 1 号 (1930.1) の「CLUB 紙上展」第 5 回に応募し、《風景》が第 1 席に入賞。選者深澤索一は「慥かなものです。氏の舶来情調が特徴でせう。(中略) 画面全体のベタ摺は一考を要します」と評している。また、『版画 CLUB』第 2 年 2 号 (1930.2) には《年賀状》が掲載されている。なお現在、『きくづ』が確認されているのは第 2 号 (1929.12) から第 2 巻 3 号八木澤英三追悼号 (1931) のうち 7 冊と、特別号を加えた 9 冊である。当時、横浜市中区本牧町字長久保 3789 に在住。【文献】『きくづ』2-1 (1931.1) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

八木澤俊雄 (やぎさわ・としお) 1905～1984

1905 (明治 38) 年 7 月 20 日栃木県に生まれる。1929 年に明治大学法学部を卒業後、1930 年に日本ビクター蓄音機 (株) に入社。1943 年には満州蓄音機 (株) に出向。戦後は復帰して 1951 年に取締役社長となり、1972 年ビクター音楽産業 (株) の設立とともに初代社長に就任。「音楽は趣味、し好品ではなく生存必需品」が口癖で、作曲家吉田正の「異国の丘」をはじめ、数々の名曲を世に送り出し、フランク永井、橋幸夫、ピンク・レディーなど幅広い人気歌手を育てた。藍綬褒章 (1973)、勲四等旭日小綬章を受賞。1984 (昭和 59) 年 4 月 21 日逝去。版画関係は、大学を卒業した 1929 年に横浜において八木澤英三・近藤雅平・福田信二の 3 人が版画同人誌『きくづ』(1929～1931) を創刊する。八木澤俊雄は特別号『きくづ ALBUM』(1930) に《自画像》を発表。版画はこの号のみで、第 2 巻 1 号 (1931.1) 一周年記念号には「よろこびの詞」と題して巻頭の言葉を寄せている。この中で、「版画こそ……良き心の浄化手段であり魂の安息所である。(中略) 誰か之にまさる社会苦脱の道を擧げ得られやうか」と記し、『きくづ』の一周年記念の祝辞としている。これに対し、近藤は編集後記で「君は畑業ではあるが要するに『きくづ』の生の親のようなの……」と記し、同号の「同人近時片々」では「創刊の際は実に器用な産婆役を演じた。否末ある、トランプ、麻雀、法螺の貝吹き、是だけは実に堂に入れたもの。世の中はうまく出来て居るものだ。君の会社はラッパが専門、次に市場に現はれますはホラ貝ラッパの蓄音器とござい」と紹介している。このことから『きくづ』創刊に深い関わりがあると考えられるが、創刊号未見のため、詳細は不明。なお、『きくづ』については「八木澤英三」の項を参照されたい。1930 年当時、「横浜市神奈川区富家町 1233 大場方」に在住。【文献】『ジャパン WHO was WHO 物故者事典 1983～1987』(日外アソシエーツ 1988) / 『栃木県歴史人物事典』(下野新聞社 1995) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

八木沢富平 (やぎさわ・とみへい)

佐伯留守夫・岩田信義・安西七郎ら 9 人が参加して発行した版画集『我等の版画』(刊行年不明) に《画家》《人のある風景》を発表。前記の佐伯ら 3 人は川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校 (現・宇都宮高等学校) に在学中、生徒が発行した版画同人誌『刀』(1928～1932 全 13 号) に作品を発表している。また、佐伯は『刀』に掲載された版画《雪景色》(第 4 輯・1929 所収) などを『我等の版画』に再度発表しているため、1929 年以降に発行したものと推測される。【文献】『我等の版画』(刊行年不明) (加治)

柳生周三郎 (やぎゅう・しゅうざぶろう)

1922 (大正 11) 年の第 4 回日本創作版画協会展に木版画《社頭の夕》が入選。出品時は東京に住む。この作品は、『版画』第 1 巻第 3 号 (版画社 1922.4) に収録され、同誌「雑記」に「柳生周三郎君の『社頭の夕』は今年初めての入選で同君は版画社の研究部会員です」と紹介されている。また、翌年の『詩と版画』第 2 輯 (1923.4) にも木版画《風景》の図版が掲載された。【文献】『版画』1-3 (版画社 1922.4) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

葉木重夫 (やくぎ・しげお)

1922 (大正 11) 年に神戸弦月画会が主催した創作版画

展 (23～26 神戸・三宮三〇九番館) に《子を抱ける母》《風景》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『創作版画展覧会目録』(神戸弦月画会 1922) (三木)

矢崎好幸 (やぎき・よしゆき) 1894～1950

1894 (明治 27) 年 9 月 20 日山梨県東山梨郡平等村落合に生まれる。1915 年山梨県師範学校を卒業。短期現役兵を務めた後、同年上京。同舟舎に学ぶ。1919 年文部省教員検定試験 (西洋画用器画科) に合格。翌年山梨県師範学校教諭となり、図画および手工教育の分野で活躍。1931 年には図画手工の研究組織である「造形美術協会」の結成に発起人として参加した。著書に『染色芸術クレオン染』(青陽社 1925)『新手工芸 卵殻モザイクとカゼックス工芸』(教育研究会 1930)『郷土手芸 卵殻モザイクの作り方』(現代之婦人社 1933)『セメント工芸』(丸善 1935)『最新図案教程』(総合美術研究所 1936)『実技詳解セメント工』(学校美術協会 1939) などがある。版画教育にも熱心で、編著『郷土風景 創作版画と其の作り方』(教育美術館出版部 1933)があり、矢崎の多色木版による口絵《冬の荒川橋》《甲斐八珍果》、木版印刷による《製菓工場横顔》《印刷所小景》など 6 点と中表紙・扉絵・カットなどの他、矢崎が指導した師範学校生徒 40 名による木版・リノリウム版による版画 80 点の図版が解説と共に収録され、巻末に矢崎執筆の「創作版画と其の作り方」が付けられている。その後、1939 年に師範学校を退職し、東京美術学校の「臨時セメント美術教室」の開講を準備。翌年担任講師となったが、同教室が 1944 年の美術学校改革の際に廃止されたため、同年退職した。戦後は、1946 年に「セメント美術工作研究所」を創設し、所長に就任。また、日本精陶株式会社取締役、川崎鍛鋼建材株式会社取締役社長などを務めた。1950 (昭和 25) 年 2 月 18 日逝去。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) / 地域資料デジタル化研究会資料「郷土風景—創作版画と其の作り方—」2002 (<http://www.digi-ken.org/archives/kyodo> 2019.07.01 閲覧) (三木)

矢島貞夫 (やじま・さだお)

長野県須坂では小林朝治を中心として 1933 (昭和 8) 年夏に平塚運一を講師に招き「版画及び図画講習会」(会場：須坂小学校)を開催した。それを契機に「信濃創作版画研究会」(1936 年「信濃創作版画協会」となる)が発足し、8 月に版画同人誌『櫟』(1933～1937 全 13 輯)を創刊した。当時、井上小学校の教員であった矢島は、1933 年 10 月に小林朝治・北澤博ら 10 人で旗揚げした版画を含めた絵画作家の集まり「十人社」展に第 7 回展 (旧郡役所楼上 1936.10.20～21) から参加し、油彩画 3 点を出品。会員に推挙されている。その「十人社」同人の影響から版画をはじめたようで、1936 年 11 月に発行された『櫟』第 11 輯には《瓶》を、第 12 輯 (1937) に《賀状》、第 13 輯 (1937.6) に《都会風景》の木版画を発表している。13 輯には「貞雄」が使用されているが、印刷ミスと判断。なお、「日本きりえ協会」会員に矢嶋貞夫 (1903～1991) がいるが、同一人の可能性がある。この矢嶋は中村泰三との共著『風物詩画集 街角の詩』(秀版舎 1981)で挿画 (切り絵) を担当している。【文献】清水博『臥竜山物語』(須坂新聞 1984) / 『須坂版画美術館 収蔵品目録 2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

矢島 仁 (やじま・じん)

長野県大字中御所に生まれる。長野県師範学校一部 5 年に在学中、同校生徒による版画同人誌『樹水』(1938～1940? 4 冊)の第 1 号皇紀 2598 年版 (1938) に《飯綱》を発表する。1939 年に同校を卒業し、1950 年当時は長野芹田小学校に、その後、長野市立後町小学校などに勤務する。戦後、雑誌『信濃教育』に短歌や随筆などを投稿している。【文献】『樹水』1 / 『卒業生名簿 昭和 25 年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

八代榮治 (やしろ・えいじ) 生年不詳～1928

1924 (大正 13) 年東京美術学校彫刻科木彫部選科に入学。彫刻を学ぶ傍ら、校友会活動として木版画を試みるも、在学中の 1928 (昭和 3) 年 3 月逝去。その後、同年の第 3 回椎の樹版画展 (6.15～16 美術学校・大講堂廊下) に「八代榮二」の名で遺作が陳列され、7 月発行の『校友会月報』第 27 巻第 3 号に作品図版 1 点が掲載された。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録 (和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) / 『校友会月報』27-3 (東京美術学校校友会 1928.7) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和 47 年版』(1972.12) (三木)

安井曾太郎 (やすい・そうたろう) 1888～1955

1888 (明治 21) 年 5 月 17 日京都市に生まれる。1903 年画家を志し、京都市立商業学校を中退。翌年聖護院洋画研究所に入り、浅井忠に師事。同門に梅原龍三郎がいる。1906 年師とともに新設された関西美術院に移る。1907 年渡仏。アカデミー・ジュリアンに入り、ジャン・ポール・ローランスに学ぶ。1910 年研究所をやめ、自由な作品研究に入り、ミレー、ピサロ、セザンヌらの造形に学ぶ。1914 年帰国。翌年の第 2 回二科展に滞欧作品 44 点を特別陳列し、会員となる。その後、二科会の中心的作家として活躍するも、1935 年帝国芸術院会員となったのを機に辞し、翌年「一水会」を結成。1944 年東京美術学校 (のち東京芸術大学に改編) 教授となり、帝室技芸員にも任命された。多くの後進を育て、1952 年退官。同年文化勲章を受章。人物画・肖像画・風景画・静物画に独自の写実的作風を確立し、梅原とともに昭和の洋画界をリードした。安井の版画作品は少ないが、1932 年 1 月から 1935 年 9 月にかけて石原求龍堂から『安井曾太郎先生創作版画集』として木版画を頒布。100 部限定で、最初は 12 点組として計画していたが、全 10 点で終わる。第 1 回配布の《椅子に凭る女》(20 度摺 1932.1) と第 2 回配布の《静物》(別題：果物 25 度摺 1932.5) は彫摺を平塚運一が担当したが、残りの《薔薇》(1932.7)《外房風景》(1932.12)《初夏》(1933.7)《正月娘姿》(1933.12)《魚とさざえ》(1934.3)《画家とモデル》(1934.6)《レコードを聴く人》(1935.3)《十和田湖の秋》(1935.9) の 8 点は彫摺を職人が担当した (制作年は水原秋櫻子『安井曾太郎』による)。これらの作品は日本版画協会展と同協会主催の海外展にも出品された。まず、1933 年の「巴里に於ける日本現代版画展覧会準備展覧会」を兼ねた第 3 回展に《椅子による少女〔凭る女〕》《静物》《外房風景》《薔薇》《初夏》を推薦出品。平塚は「安井氏が近代的な感覚を平面な局限された版の上に巧みに構想してゆく有様は、実に見事な感じがする。引合ひに出して悪いけれども、私の心持では何時も、梅原氏を

東洋風な木版の極とし、安井氏を欧風の木版の粹として尊敬している」(「於巴里日本現代版画展準備並第三回日本版画協会展に就て」『みづゑ』344)と高く評している。これらの作品は、翌1934年にパリで開かれた「日本現代版画とその源流展(パリ装飾美術館)」にも出品された。また、1935年の「日本現代版画米国画準備展」を兼ねた第4回展に《画家とモデル》《レコードを聴く人》《十和田湖の秋》《魚とさざえ》を賛助出品。これらの作品は、翌1936年にジュネーブで開かれた「日本の古版画と現代版画展」(ジュネーブ市博物館)にも出品された。この他、1936年から翌年かけて実施された「日本現代版画展」(欧米9都市を巡回)の巡回先の一つであるロンドンのアーリントン・ギャラリーでの展覧会(「日本の多色版画:古典と現代展」1937.1)に《静物》《正月娘姿》《初夏》《薔薇》が出品されている(他会場への出品は不明)。その後、日本版画協会への出品はないが、1939年の会員名簿では「客員」になっている。また、1938年の一水会編『丹青』第1巻第2号(教育美術振興会 1938.9)に銅版画《鏡》、1939年の第2巻第2号(1939.9)に石版画《少女と大このはづく》を発表。《鏡》は日本エッチング研究所で刷った(『エッチング』69)というが、1940年の第1回日本エッチング展(12.10~13 銀座・資生堂画廊 主催:日本エッチング作家協会)にも出品された。また、この《鏡》と同じ頃の銅版画に《女性》(11.9×9.0cm 兵庫県立美術館蔵)もある。戦後の作品としては、木版・手彩色の《湯河原》(1952)が知られる。1955(昭和30)年12月14日神奈川県湯河原町で逝去。翌年「安井曾太郎遺作展」(東京:ブリヂストン美術館・[東京]国立近代美術館 京都:京都市美術館)が開催されたが、両会場で12万人を越す入場者があった。1957年にはこの展覧会の純益金などを基に「安井賞」が設けられ、1997年に終了するまで具象系洋画をめざす新人画家たちの登竜門となった。【文献】水原秋櫻子『安井曾太郎』(石原求龍堂 1944)／『近代日本版画大系』3(毎日新聞社 1976)／『安井曾太郎展一代表作とデッサンにみるその世界一』図録(兵庫県立近代美術館 1996)／桑原規子・春原史寛編「海外における日本現代版画展出品目録一覧」『日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—』(平成17~19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 2008)／『エッチング』96(三木)

安井 隆(やすい・たかし) 1904~没年不詳

1904(明治37)年大阪に生まれる。1922年大阪府立四條畷中学校を卒業。1924年洋画家を志し、上京する。川端画学校に学び、1926年文化学院美術科に第1回生として入学。石井柏亭・山下新太郎の指導を受ける。1928年同校研究科を卒業。同年第15回二科展に《裸婦》が初入選、その後は第21回展(1934)まで連続して出品する。また、大札記念京都美術館展覧会(1934)や一水会第4~7回展(1940~43)に油彩画・水彩画を出品するが、その後展覧会への出品は途絶える。版画に関しては、1933年8月に日本エッチング研究所製エッチングプレス機を購入(『エッチング』11)。『エッチング』第14号(1933.12)に人形を描いた銅版画が掲載され、西田はこの作品について「モダンでバリ風」と紹介している。エッチング技法を習得した経緯は不明。【文献】『エッチング』11・14／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／梅野隆「美を拾う」『藝林』86(美術研究所藝術林 1992.6)(樋口)

安田 鼎(やすだ・かなえ)

愛知県岡崎で発行された文芸が中心ではあるが版画の発表も行った同人誌『志じ満』の創刊号(1926.11)に《扉絵》と裏表紙絵を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

安田公義(やすだ・きみよし)

1929(昭和4)年の第9回日本創作版画協会展に木版画《読書》を出品。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)(三木)

安田草月(やすだ・そうげつ)

1934(昭和9)年、大分県中津市では島美智緒・武田由平らが版画と文芸の同人誌『鳩笛』を創刊する。都会的な洒落た表紙の版画誌であるが、2輯で休刊。安田はその第1輯(1934.1)に《静物》《あゆ》と俳句、第2輯(1934.4)には《穂麦》と俳句を発表。当時、中津市北門通りに在住。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

保田素一郎(やすだ・そいちろう) 1909~1974

1909(明治42)年広島県福山市に生まれる。関西大学経済学部、文化学院文学部卒業。12歳の頃に熊本県八代の郷土玩具「板相撲」と出会い、大学時代から郷土玩具の収集を始める。岡山市役所職員、朝鮮放送協会アナウンサーを経て、戦後は尾道市長江口で染色の店を営みながら、郷土玩具の収集を行ない、「おもちゃの家」と名づけた離れで「保田コレクション」を子供たちに公開する。尾道市文化財保護委員を1958年発足以来亡くなるまでの16年間務めた。版画制作では朝鮮釜山の清永完治によって発行された版画同人誌『朱美之集』(1940~1942 全5冊)の第1冊(1940.5)に《蔵票鮮女》を発表。著書に『山陽郷土玩具考』(朝日書房 1935)『性と玩具』(郷土玩具研究会 1967)などがある。1974(昭和49)年の初夏、病に倒れ逝去。1940年当時は釜山府昭和通り2-29に在住。【文献】「第1回会員[名簿]」『朱美通信』1 [1940.58]／保田素一郎『白石産 生漉和紙』(郷土玩具研究会 1967)／長岡 弘「画家小林和作と郷土玩具収集家保田素一郎」『博物館研究』21-4(1986.4)／『創作版画誌の系譜』(加治)

安田 稔(やすだ・みのり) 1881~1965

1881(明治14)年10月旧長岡藩士の次男として長岡市に生まれる。父が東京神田猿樂町(三崎町との説もある)で旅館を開業したため、一家で上京。1902年独協中学校を卒業。小山正太郎の不同舎に学び、1903年東京美術学校に入学。太平洋画会第2回展から第5回展(1903~1906)まで水彩画や油彩画を出品するが、1906年同校を中退し、1907年渡独。ミュンヘン美術大学に学び、1911年同校を卒業する。その後、英仏に2年間学び、ロンドンで肖像画家として英国でも知られていた石橋和訓を知り、影響を受ける。1913年帰国(『美術週報』1-5 1913.11.5)。1914年3月東京大正博覧会に出品。同年10月の第8回文展に《お茶どき》が初入選し、以降文展(12回展まで)、帝展(第1・2・9回展)、第1回海洋美術展(1937)、第1回聖戦美術展(1939)等に出品する。この間、日本大学で美学を教授、1932(昭和7)年、明治神宮聖徳記念絵画館に《樺太国境画定之図》を描く。戦中は新潟

県の政治家大竹貫一と共に秋田県横堀に疎開し同地で終戦を迎える。戦後も度々秋田を訪れて制作。1965（昭和40）年逝去。版画については、1916年石川寅治・中川八郎・中澤弘光と「方友画会」展を開催（5.1～7 大阪・三越）。1917年12月に4人の木版集『新領土みやげ』（金尾金文堂）を刊行、石川寅治《打狗港》（台湾）、中川八郎《漢江の春》（朝鮮）、中澤弘光《慶州邑内の一》（朝鮮）、安田は《オロチヨンの娘》（樺太）を制作。『中央美術』第4巻第3号（1918.3）の展覧会欄によると、「中川・中澤・石川・安田 四氏洋画展覧会」（1918.1.23～29 大阪・三越）が開催され、「石川氏は臺灣、中川氏は朝鮮、安田氏は樺太、中澤氏も朝鮮という風に新領地の寫生を主としたもので甘い一般の人から歓迎さるゝ者のみであった」と評されている。木版集『新領土みやげ』は、領土拡大が続いた時代の反映か。因みに日本の文化と浮世絵を学ぶために1909年に来日したドイツのフリッツ・ルンプの滞在先が安田旅館で、安田の紹介で伊上凡骨に弟子入りすることになり、「パンの会」の異色会員として迎えらるることになる。【文献】『中央美術』4-3（1918.3）／祖田浩一『匠の肖像』（朝日新聞社 1988）／小見秀男『安田稔』『新潟県美術博物館だより』32（1989.2.1）／『石川寅治展』図録（高知県立美術館 2002）／『郷土に残る小山正太郎と不同舎の画家たち』展冊子（新潟県立近代美術館 2015）／粹狂老人『安田稔』（アート・わの会コラム 2018.10）（樋口）

安田鞞彦（やすだ・ゆきひこ） 1834～1978

1884（明治17）年2月16日東京日本橋区新葎町（現・中央区日本橋芳町）の料亭百尺の4男に生まれる。本名は新三郎。1896年父の死により下谷上根岸に転居。上野公園に近く、帝室博物館に通い、日本絵画協会共進会を見て画家を志す。1898年1月小堀鞞音に入門、「鞞彦」の雅号は川崎千虎が命名。同年10月「日本美術院」が創立され、日本絵画協会共進会第4回展と共催した美術院（院展第1回）に《家貞》を出品する。また同門の磯田長秋らと「紫紅会」を結成するが、1900年今村紫紅を知り、紫紅の参加で「紅児会」と改名する。1901年東京美術学校選科に入学するが意に沿わず半年で退学。1902年小堀鞞音の主宰する「歴史風俗画研究会」に参加し、院展を主に歴史風俗画会展や紅児会展に《吉野訣別》（紫紅会 1899）、《遣唐使》（第4回院展 1900）等の歴史画を出品する。1907年岡倉天心を会長とする「国画玉成会」の創立に参加し、天心に認められ、五浦の研究所に招かれる。天心等の援助により12月から10カ月ほど奈良に滞在し古美術研究に専念するが、体調を壊し翌年8月に帰京する。1911年原三溪の知遇を受け、小田原に転居。翌春今村紫紅と共に小田原に住む。第6回文展に《夢殿》を出品し、二等賞を受賞。1914年大磯に転居し永住の地となる。同年9月横山大観・下村観山の「日本美術院」の再興に際し、発起人として参加、経営者の一人となる。10月の再興院展に《御産の禱》を出品。以後、再興院展を中心に多数の作品を描いている。代表作に《風神雷神》（第16回院展 1929）《孫子勒姫兵》（第2回新文展 1937）《義経参着》（紀元2600年奉祝美術展 1940）《黄瀬川の陣》（第28回院展 1941）《王昭君》（第32回院展 1947）《大和のヒミコ女王》（第57回院展 1972）等があり、晩年は梅や椿等の静物を好んで描いた。1937年帝国美術院会員。1914年の松田改組による新文展には審査員として参加。1944年から1951年まで東京美術学校教授を勤める。1948年文化勲章受章。1958年日本美術院理事長となる。1918

年頃から良寛研究を始め、傾倒し、書体も良寛風となる。『良寛遺墨集』（第一書房 1928）や『良寛』（筑摩書房 1960）の監修をしている。1975年には自作歌集『高麗山』（中央公論美術出版）を出版。版画では1904年3月に日露戦争を描いた三枚続き《九連城激戦松平中尉奮戦ノ図》（印刷兼発行者・平のや樞葉三之助 彫師・堺町梅澤）を描き、12月には日露海戦を描いた三枚続きを描いている。1929年前田青邨・小林古径・松岡映丘・下村観山等共に『伝教大師御絵伝』（比叡山延暦寺 多色木版）、1934年『凡骨版画集』《朝顔》（凡骨版画会 多色木版）、年代不詳《桔梗》（多色木版）等がある。1978（昭和53）年4月29日神奈川県大磯町で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和54年版（東京国立文化財研究所 1979）（森）

安本亮一（やすもと・りょういち） 1901～1950

1901（明治34）年東京市浅草区浅草に生まれる。父は人形師安本亀八（三世）。1919（大正8）年か、東京美術学校彫刻科塑造部選科に入学し、建昌大夢に師事。一方で、池部鈞・岡本一平にも師事して漫画を描き、1923年の関東大震災を特集した『校友会月報』第22巻第5号「震災災記念号」に「震災漫画」を発表している（月報は未見、図版4点は『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』に収録）。1924年同校を卒業。その後、時期は不明だが、東京朝日新聞社学芸部に嘱託として勤務し、紙上に漫画を発表。1940（昭和15）年には「新日本漫画家協会」会員になっている。版画は、独学と思うが木版画を手がけ、1928年の第8回日本創作版画協会展に《相撲》《安来節》、第6回春陽会展に《仕切られんとする出羽ヶ嶽》《万歳》《里帰り》、第9回帝展に《手品》が入選。翌年の第7回春陽会展にも《出を待つ節劇の太夫》《ダンスホールにて》が入選した。1930年には旭正秀・野村俊彦・松村松次郎・宮尾しげをが結成した『版画』の同人となり、第4号（1930.3）に《タバコ》、第5号（1930.5）に《踊》を発表。同年の『版画』同人第1回展（4.2～6 有楽町・朝日新聞社ギャラリー）にも《煙草一》《煙草二》《安来節》など16点を出品したが、その後の活動は不明。1950（昭和25）年11月6日長野市で逝去。【文献】『物故作家及美術関係者（安本亮一）』『日本美術年鑑』1947～51年版（美術研究所 1952）／『『版画』同人第一回展覧会出品目録』（1930）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』（ぎょうせい 1997）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『創作版画誌の系譜』（三木）

矢田卿二（やだ・けいじ） 1907～1965

1907（明治40）年6月23日島根県松江市に生まれる。本名は桂一。作品発表には「卿二」の他、「桂示」「桂一」の名も使う。時期は不明だが上京。少年期から石版印刷業に従事し、版下の描画も経験する。版画は、平塚運一に木版画の指導を受けたが、その後石版画に転じ、1932（昭和7）年の第2回日本版画協会展に「桂示」名で《顔》《吹雪の夜》《枯木と小屋》が初入選。翌1933年からは「卿二」名を使い、同年の第11回春陽会展に《梨》、第3回日本版画協会展にも《明け方の大鳥》が入選した。1934年「新版画集団」が主催した第1回版画アンデパンダン展（6.12～14 神田・東京堂画廊）に《浅春》などを出品。翌1935年に「新版画集団」に参加し、同集団主催の小品展（5.28～31 神田・東京堂画廊）に《白梅》《公園の道》、現代版画展（9.22～30 浅草・松屋）に《池辺》

《洋上漁船》、第5回展(12.7~29 銀座・伊東屋)に《風景》、1936年の第6回展(10.3~5 銀座・伊東屋)に《習作A》《習作B》《水面》を出品。また、機関誌の『新版画』第17号(1935.7)に《瓦山》、第18号(1935.12)に《風景》(第5回展出品作か)を発表。その間、第5回日本版画協会展(1936)にも《午前》が入選している。1936年12月に「新版画集団」は解散し、翌年3月に小野忠重らにより「造型版画協会」が結成されたが、創立会員には名を連ねていない。しかし、第1回展(1937.6.10~13 銀座・紀伊国屋画廊)には同人として参加し、《幼児A》《幼児B》《大川風景》《肖像》を出品。以後、1943年の第7回展まで連続して出品した。なお、1939年の第3回展からは本名の「桂一」の名を使い、1942・43年には事務所を担当しているが、その頃の住所は「東京市京橋区入舟町三丁目十三番地」であった。またその間、春陽会展にも再び出品し、第18回展(1940)に《コーヒー店》、第19回展(1941)に《病父を圍む》、第20回展(1942)に《上着の女》、第21回展(1943)に《室内》、第22回展(1944)に《子供》が入選した。太平洋戦争末期に郷里の松江市に戻り、1965(昭和40)年2月11日同地で逝去。【文献】小野忠重「やだけいじ 矢田卿二」『原色 浮世絵大百科事典』10《大修館書店 1981》／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／加治幸子編「新版画集団展目録」『版ニュース』4・別冊(輝開 1998.7)／加治幸子「造型版画協会の航跡」『生誕100年 小野忠重展』図録(町田市立国際版画美術館 2009)／『創作版画誌の系譜』(三木)

矢田部俊二(やたべ・しゅんじ) 1887~没年不詳

幕末から明治における英学者・植物学者・教育者であり、文学史における新体詩運動の旗手の一人としても活躍した矢田部良吉の次男として、1887(明治20)年8月21日東京に生まれる。白馬会に第9回展(1904)から第13回展(1908)まで、油彩画やパステル画を出品。1910年、白馬会系の岡本帰一・清宮憲靖と生巧館の菊地武嗣等の仲間たちは版画同人誌『白刀』を創刊する。矢田部もその発行に力を注いだ1人であり、第1号(1910.11)の発行者にもなっているが、版画作品は掲載されておらず、矢田部の図柄を元に清宮彬が彫った《江》が1号に掲載されているだけである。馬淵録太郎著『私家版 木口木版伝来と余談』(中央公論事業出版)には矢田部も版画を志す一人として紹介されているが、現在版画作品は確認されていない。なお、『白刀』は準備号と見られる2冊と第1号(1910.11)の刊行が確認されているが、馬淵によると、この号以外にも準備号と見られる2冊ほどが発行されていたとしている。【文献】馬淵録太郎『木口木版伝来と余談』(中央公論事業出版制作 1985)／『明治期美術展覧会出品目録』(中央公論美術出版 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

柳川槐人(やながわ・かいと)

1925(大正14)年中原実経営の画廊九段で開催された第2回無選首都展に出品する。またこの年、雑誌『マヴォ』7号「建築と劇」号(1925.8)にリノカット《街頭を歩く者》を発表、その時期にマヴォ同人として活動する。また、この年10月発行の萩原恭次郎詩集『死刑宣告』(長隆舎書店)に3点のリノカットを発表した。1926年岡田龍夫・矢橋公麿文責「マヴォ大聯盟再建に就て」と題するアピールに署名し、『文党』や『太平洋詩人』などの文芸雑誌、

『みづゑ』などの美術雑誌に発表している。この年、アナキズム文芸雑誌『NNK』を創刊する(創刊号のみ確認)。1927年北原千鹿を中心に結成された工芸グループ「工人社」に参加するが、翌年退会。また工人社結成と同じ頃、同社の同人であった信田不洋らと「舞台装置社」を結成。1928年に展覧会を開催した。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) (滝沢)

楊箸華泉(やなぎはし・かせん)

大阪で前田藤四郎や武田新太郎らが発行した版画同人誌『黄楊』(黄楊社)は創刊号が確認されている。その創刊号(1933.8)に《東山》《寧楽》を発表。《寧楽》の作者言では、「落付いた情緒を出そうとして此の絵が出来ました。(中略)秋近い頃で緑を飽満に盛った松に魅惑されたのです。版木は朴で一種独特の手法を試みたつもりです」と記している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

柳澤／柳原風居(やなぎざわ／やなぎはら・ふうきよ)

生没年、経歴ともに不詳。姓はふた通りあるが、大正期の資料では「柳澤」が多い。渡邊版画店より1921(大正10)年12月に《水辺の夕暮れ》を、1922年1月に《農家》を、同2月に《日盛り》をそれぞれ出版。1922年6月に渡邊版画店が主催して日本橋白木屋呉服店で開催した「第2回新作版画展覧会」に9人の作家のひとりとして名を連ね、その3点を出品している。『鍋木清方の系譜一師水野年方から清方の弟子たちへ』によれば、1923年3月の郷土会第8回展に《田園三趣》を出品しており、清方に師事した日本画家で新版画に参加したひとりとも考えられる。【文献】「第二回新作版画展覧目録」(渡邊版画店 1922)／『渡邊庄三郎』(渡辺規編・渡辺木版美術画舗発行 1974)／『鍋木清方の系譜一師水野年方から清方の弟子たちへ』(鎌倉市鍋木清方記念美術館 2008) (西山)

柳瀬正夢(やなせ・まさむ) 1900~1945

1900(明治33)年1月12日愛媛県松山市小唐人町に生まれる(実際は6日に生まれたという)。本名は正六。1911年父に従い、門司へ移る。1914(大正3)年門司市立松本高等小学校を卒業。画家を志し、上京。同郷の水木伸一の世界になり、村山槐多らと交友。日本水彩画研究所、のち日本美術院研究所に学ぶ。1915年第2回日本水彩画会展に水彩画《午後の会社》、再興第2回日本美術院展に油彩画《河と降る光と》が入選。以後、帰郷と上京を繰り返し、下関で個展・グループ展を開催。この頃、わずかではあるが版画も試みたようで、『柳瀬正夢生誕100周年記念 柳瀬正夢資料集成』(武蔵野美術大学美術資料図書館 2000)の「柳瀬正夢の仕事」「版画」に1916年に制作された2点の木版画、《風景》(25.7×15.8cm)《風景》(18.6×13.0cm)が収録されている。いずれも武蔵野美術大学美術資料図書館「柳瀬コレクション」に含まれるもので、柳瀬信明によれば、「たまたま家にあるまだ未整理のものを整理していましたが、一九一六年、柳瀬が一六歳の時の木版画が四点ほどありました。上京して槐多と会った二年後の作品です」(座談会 柳瀬・利根山光人・萬木康博「ねじ釘の画家・柳瀬正夢をめぐる」『季刊 武蔵野美術 特集正夢』81 1991.1)と証言している。1920年読売新聞社に入社。編集部配属され、時事漫画を描く。また、翌年には第2次『種蒔く人』同人となって装幀の仕事始めた。同じ頃、「新興美術」に興味を持ち、

「未来派美術協会」に参加。第2回展(1921)・第3回展(1922)に「穴明共三」(アナキー・キョウサン)の名で出品するも失望し、1923年には村山知義らと前衛美術集団「マヴォ」を結成。展覧会を開催したほか、機関誌『マヴォ』(マヴォ出版部)を刊行したが、その第4号(1924.10)にリノカット《訓練された兵隊》(15.0×14.0cm)を発表している。1924年読売新聞社を退社。同年「三科造形美術協会」創立に参加。翌年の「三科展」に出品し、「劇場の三科」にも出演するも、会員同志の不和により解散。1925年『無産者新聞』の専属画家となり政治漫画を描く。また、この頃から本格的に社会主義に傾斜し、同年の「日本プロレタリア文芸連盟」の創立に参加。以降、プロレタリア芸術運動を推進。1926年「日本漫画連盟」創立委員、演劇集団「前衛座」創立同人、「日本プロレタリア芸術連盟」中央委員。1928(昭和3)年「全日本無産者芸術連盟」(ナップ)の結成に参加し、後に中央委員。1929年「プロレタリア美術家同盟」(ヤップ)の創立に参加。同年『無産者階級の画家 ゲオルゲ・グロス』(鉄塔書院)を出版。1930年読売新聞社漫画部創設にあたり再入社。同年『柳瀬正夢画集』(叢文閣)を出版。翌年日本共産党に入党。1932年治安維持法違反容疑で逮捕され、翌年懲役2年・執行猶予5年の判決を受け保釈。読売新聞社に復帰。1936年頃から再び油彩画制作に取り組む。1938年『コドモノクニ』に童画連載。また1939年から1941年にかけて『子供之友』に「夏川八郎」の名で挿画を連載。1940年には「北支風物油画展」(4.12～15 銀座・亀屋)を開催し、油彩画91点、水彩・素描86点、写真140点を出品した。1943年東京府下三鷹町に自宅とアトリエが完成。同年日本版画奉公会会員。1945(昭和20)年5月25日新宿西口広場で空襲に遭い逝去。大正から昭和にかけて、日本における前衛美術とプロレタリア美術に大きな足跡を残した生涯であった。【文献】井出孫六『ねじ釘の如く一画家・柳瀬正夢の軌跡』(岩波書店 1996)／『生誕100年記念 柳瀬正夢展』図録(愛媛県美術館ほか 2000)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『創作版画誌の系譜』(三木)

矢野 学 (やの・がく)

大分県師範学校において図画教師武藤完一は『版画CLUB』主宰の中島重太郎の協力を得て、1931(昭和6)年の夏休みに最初の「版画教育講習会」(講師:平塚運一 8.3～7 参加者29名)を開催。この講習会を機に武藤は版画同人誌『彫りと摺り』(1931～1933 全8号)を創刊する。矢野は講習会に参加し、同誌第1号(1931.9)に《春日浦》を発表。【文献】『創作版画講習会其他版画展等』『郷土図画』(1-5 1931.10)／池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

矢野義吉 (やの・よしきち)

1928(昭和3)年、山本鼎選による第15回『『アトリエ』』誌上「版画」展覧会(1928.10)で、《狗子》が佳作に選ばれる。当時、高知県に在住。【文献】『アトリエ』5-10(1928.10)(樋口)

矢野口佳郎 (やのくち・よしお) 1918～

1918(大正7)年長野県南安曇郡有明村(現・安曇野市穂高有明)に生まれる。長野県師範学校2部2年に在学中、同校生徒による版画同人誌『樹氷』(1938～1940 4冊を

確認)の第1号皇紀2598年版(1938)に《鐘撞堂》を発表する。1939年に同校を卒業し、長野県師範学校附属小学校に勤務。戦後は長野県大町第三中学校に勤務する。『図工科の楽しい研究授業』(明治図書出版 1960)のうち「鑑賞 中学生」の執筆を、また、平林治康著『あづみ野三郷の民話』(郷土出版社 1990)の挿絵を担当した。2009年には安曇野市貞享義民記念館において、矢野口が水彩で描いた郷土安曇野の風景画が展示(8.1～30)された。【文献】『樹氷』1／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)／インターネット「広報あずみの」84(2009.7)(加治)

矢橋公麿 (やはし・きみまろ) 1903～1964

1903(明治36)年7月15日岐阜県に生まれる。本名は丈吉。1906年家族で北海道雨竜郡雨竜村に移住する。1915年頃、雨竜村立雨竜尋常小学校渭ノ津分教場を卒業し、開墾に従事する。1920年12月兄と二人で上京、現在の文京区代田町に住む。1921～1923年頃川端画学校に通ったか。またアナーキストが近衛文麿邸を訪ねて面会を求めるといふ出来事があり、これを機に「公麿」の名を用いる。1923年8月村山知義らと「二科落選歓迎移動展覧会」を試みるが中止となる(住谷磐根の解説を参照)。この後マヴォに参加し、翌1924年6月に「意識的構成主義的連続展」を小石川護国寺前のカフェ鈴蘭で開催する。『マヴォ』創刊号(1924.7)に随筆「狂愚の愛一不具者の言葉一」を発表。またこの頃岡田龍夫らとアナーキスト詩人のたまり場となっていた「南天堂」に出入りする。『マヴォ』2号(1924.8)にリノカット《自画像》と詩2編を発表し、ほかにも版画集『マヴォ・グラフィック』第3集を発行した。『マヴォ』3号(1924.9)に構成物の作品図版、矢橋参加の演劇的写真を発表。『マヴォ』4号(1924.10)に構成物の作品図版、リノカット《貴族の像》、詩を発表。この年11月の第1回首都美術展、12月の「マヴォ作品展」に構成物を出品する(共に中原実経営の画廊九段で開催)。1925年4月第2回無選首都展に出品する。その後『マヴォ』5号(1925.6)にリノカット1点と随筆を、6号(7月)に寸劇の脚本と詩を、7号「建築と劇」号(1925.8)にリノカット2点を発表。この年11月発行の萩原恭次郎詩集『死刑宣告』(長隆舎書店)にリノカットを2点発表する。1926年4月『文藝市場』(2巻4号)に戯曲を発表。岡田龍夫らと5月発行の『文党』(2巻5号)、『建築新潮』(7巻5号)、『みづゑ』(255号)などの文芸や美術の雑誌に「マヴォ大聯盟再建に就て」と題するアピールを発表し、マヴォ復活を図る。また、5月にアナーキストの詩人らと文芸雑誌『太平洋詩人』を創刊し、随筆などを発表、以降も随筆や詩を発表した。この年11月、小野十三郎詩集『半分開いた窓』(太平洋詩人協会)が発行され、装幀とリノカットによる挿絵を担当した。1927年1月萩原や小野らの詩人と矢橋や岡田ら美術家らでアナーキズム雑誌『文藝解放』を創刊。9月全無産階級文芸雑誌『バリケード』を創刊。1928年1月、岡本潤詩集『夜から朝へ』(素人社書屋)が発行され装幀を行う。またリノカットによる挿絵も寄せる。6月飯田徳太郎らとアナーキズム文芸雑誌『単騎』(矢橋編輯)を創刊。この頃から1930年代初めにかけて、『悪い仲間』『文藝ビルディング』『自由聯合新聞』『黒色文藝』『矛盾』などのアナーキズム文芸雑誌に詩や散文を発表してアナーキストとして活発に活動する。1933年片柳忠男と戸田達雄創業の宣伝広告会社「オリオン社」に勤務する。1934年オリオン社が1月創刊した雑誌『オー

ル女性』の編集を担当する(1939.5まで)。1940年オリオン社が出版部門を独立させて株式会社大和書店を創業し、編集担当の役員となって時局下の出版に従事する(40冊程度の単行本を発行)。1946年6月頃までに「組合書店」を創業し、歿するまで経営と編集に携わった。この一方、1954年久保田宣行研究所発行の雑誌『宣伝会議』の発売所がオリオン社となったのを機に社に呼び戻され、編集顧問となって若手を指導した。無政府主義新聞『クロハタ』(1962『自由聯合』と改題)に寄稿。1920年代前半の文選工・写植工時代の後輩、菊田一夫の作・演出「がしんたれ」に「矢橋丈吉」の実名で登場する。1964年自叙伝『黒旗のもとに』を上梓。同(昭和39)年5月28日逝去する。【文献】矢橋丈吉『黒旗のもとに』(組合書店 1964) / 滝沢恭司「矢橋丈吉年譜考」『現代芸術研究』5(筑波大学芸術学系五十殿研究室 2003)(滝沢)

山内一彦(やまうち・かずひこ)

1933(昭和8)年7月10・11日、東京市淀橋区大久保小学校で開催されたエッチング講習会(講師:西田武雄)に参加。《[教会の屋根が見える風景]》が『エッチング』第9号(1933.7)に図版掲載されている。当時、淀橋第一小学校訓導。【文献】『エッチング』9(樋口)

山内紙魚(やまうち・しみ)

長野県須坂では小林朝治を中心として1933年に「版画及び図画講習会」(須坂小学校 講師:平塚運一)を開催し、それを契機に「信濃創作版画研究会」(1936年「信濃創作版画協会」となる)を立ち上げ、同年8月に版画同人誌『櫟』(1933~1937 全13輯)を創刊。その第8輯(1935.10)に《蔵書票》、第9輯(1936.4)に《賀状》を発表する。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

山内多門(やまうち・たもん) 1878~1932

1878(明治11)年4月29日宮崎県都城に生まれる。本名は多門。初め「都洲」、1903年より「多門」と号す。兄二人が西南戦争で戦死のため、山内家を継ぐ。16歳の時に郷里の中原南溪に狩野派の画を学び、翌1893年都城尋常高等小学校の教員となるが、日本美術院の機関誌『日本美術』に触発されて上京。川合玉堂に入門し、その後橋本雅邦に師事する。山水画を得意とし、再興日本美術院の公募展に第2回展から第10回展(1915~1923)まで連続して出品。その後は文展・帝展に出品、帝展では永らく審査委員を務め、画壇の中核として活動した。1932(昭和7)年5月30日東京で逝去。版画は赤穂浪士の事跡を82図にまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921 限300部)に《大石良雄の東下り》1図がある。【文献】『義士大観 内容一斑』(義士会出版部 1921) / 『近代日本美術事典』(講談社 1989) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) / 『山内多門生誕130年展』パンフレット(都城市立美術館 2008) / 『山田書店新収美術目録』81(2008春)(樋口)

山形駒太郎(やまがた・こまたろう) 1886~1978

1886(明治19)年3月1日神戸市に生まれる。生まれるに前後して両親を亡くし、叔父仲田夫妻に養育される。1890年叔父一家とともに東京神田練堀町に転居。1899年立教尋常中学校に入学。在学中、白馬会展を観て画家を

志す。1902年白馬会研究所に入所、黒田清輝・久米桂一郎の指導を受ける。また、同研究所で先輩の和田三造に兄事、和田に啓発されて後に油彩画とともに染色工芸の道へと進むことになる。1907年頃、仲田一家は神戸へ引き揚げ、山形一人東京に残る。1907年生巧館に入所、合田清から木口木版を学ぶ。当時、白馬会洋画研究所に籍を置く若手の中で版画に興味をもつ岡本帰一・清宮彬らと生巧館木版部に籍を置く菊地武嗣・馬淵録太郎らが集まって発行した版画誌『白刀』に山形も参加。[準備号2](1910.2)に《虹》、(第1号)(1910.11)に木版《朝》《び[美]なんかづらの家》を発表。また、第11・12回白馬会展(1907・1909)、第3回文展(1909)、1911年白馬会解散後は第1~3・6・7回光風会展(1912~1919)に油彩画を出品する。1920年和田が東京高島屋呉服店の後援で設立した「染色芸術研究所」に参加。図案染色の研究に取り組み、第9回帝展(1928)で《起重機の図(壁掛)》、第10回(1929)で《蠟染(魚市場)》が連続して特選を受賞、染色工芸作家として注目される。光風会においても第16回展(1929)に油彩画とともに《試作サラサ》を出品、以降は油彩画と壁掛・衝立・屏風・緞帳などの工芸作品を出品する。戦後も日展や光風会に出品を続ける傍ら、1960年棟方志功・前川千帆らが中心になって設立した「日版会」にも参加。1962年の第3回展に木版画《ピエロ》を出品。以降、第4~8・13回展(1963~67・73)に《洗場》《星座》《音楽》などの木版画を出品している。1978(昭和53)年4月3日東京都江戸川区で逝去。没後、1980年兵庫県立近代美術館に木版25点が収蔵された。なお、和田三造の代表作《南風》で船上右側に坐っている男のモデルが山形で、山形はスケッチブックに「南風の絵こそ尊しその絵こそわが面影ぞ永久にあり」と記している。【文献】大槻元雄「図案家としての山形駒太郎君」『美之國』5-1(美之國社 1929) / 『山形駒太郎作品集』(ダイワアート 1981) / 馬淵録太郎『木口木版伝来と余談』(中央公論事業出版 1985) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

山川永雅(やまかわ・えいが) 1878~1947

1878(明治11)年12月東京に生まれる。本名は蜂次郎。佐竹永湖・小堀鞆音に師事。1898年安田鞆彦・磯田長秋らと「紫紅会」を結成(1900年今村紫紅が加わり「紅児会」と改称)。画壇の若い革新派として注目され、新傾向の歴史画を探求する。日本絵画協会の第3・7~9・11・12・14回(1897~1903)で2度二等褒状を受賞。第1・8~11回文展(1907~1917)、東京大正博覧会(1914)、第2・4~9回帝展(1920~1928)などに出品。戦後も第1回日展(1946)に出品するが、1947(昭和22)年逝去。版画は赤穂浪士の事跡を82図にまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921 限300部)に《細川邸に義士切腹の図》1図がある。【文献】『義士大観 内容一斑』(義士会出版部 1921) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) / 『山田書店新収美術目録』81(2008春)(樋口)

山川秀峰(やまかわ・しゅうほう) 1898~1944

1898(明治31)年4月3日京都生まれる。本名は嘉雄、父亥治郎(号は霽峰)は友禅の下絵模様師。3歳の時に父の仕事の関係で伴われて上京し、日本橋浜町に住む。はじめは池上秀敏に学び、のちに大正期に入り鐫木清方に師事。郷土会展に出品。1919年第1回帝展に《振袖物語》で初入選。以来帝展で活躍。下谷区上野桜木町に住

まう。1928年第9回帝展で出品作《阿倍野》が特選となった。さらに第11回帝展でも《大谷武子姫》が特選。1931年からは無鑑査となった。同年6月に日本橋浜町に移転し、大作《序の舞》制作するも12月火災に遭う。1933年1月に麹町仮寓。4月品川下大崎（島津山）に転居。1938年12月日本画院を脱会。1939年12月、伊東深水と人物画研究団体「青襟会」を設立。翌年1月から展覧会開催。深水・寺島紫明とともに清方門下三羽烏に挙げられる。1944年12月29日疎開先の神奈川中郡二宮町二宮で脳溢血のため急逝。門下で名を成した者に、森義利・志村立美がいる。息子山川方夫は『三田文学』編集の小説家。版画では、1921年『義士大観』に《恋の齋せる敵情》。美人版画的代表作は1927～28年の『婦女四題』（《秋》《雪もよひ》《赤い襟》《たそがれ》美術社）。1936年頃に、日本舞踊シリーズの《布晒し》《羽根の禿》《越後獅子》《大原女》《五郎》《志賀山三番叟》《こんくわ》など。1942年鉄道開通七十周年記念版画《東京駅》を制作。また、挿絵家としても活躍。表紙絵例では『日曜報知』1931年1月、『週刊朝日』1936年6月。挿絵例では、『国民附録』1926年6月号掲載の「天海の夢」（講談・田辺南龍演）、『日曜報知』の1930年11月2日～23日「海谷たつ子」室生犀星、同年12月「夫婦」中村武羅夫、1932年6月20日「斬る新元剣」白井喬二等の挿絵を担当。他に「サンデー毎日」『オール読物』等でも活動。木版装丁では、1936年久米正雄著『紅頬褪する時』（新小説社）が知られる。【文献】岩切信一郎「山川秀峰について」『一寸』24（2005.11）（岩切）

山岸主計（やまぎし・かずえ） 1891～1984

1891（明治24）年9月15日長野県上伊那郡美篤（みすず）村下県に生まれる。1906年美篤尋常高等小学校を卒業。上京し、木版彫刻師の武藤季吉に弟子入り。1913年からは師匠に代わり読売新聞社に勤務し、挿絵・カットなどの彫りを担当。1916年退職し、独立。彫師として洛陽堂の出版物の装幀や『白樺』の表紙など仕事を手がけたほか、萩原朔太郎の第1詩集『月に吠える』（感情詩社・白日社出版部 1917）所収の田中恭吉による装画・素描の彫版をしたことはよく知られる。また、木谷蓬吟著『大近松全集』（大近松全集刊行会 1922～1925）の附録木版画（原画：菊池契月・北野恒富ら）、松岡映丘・山口蓬春・山村耕花らの『大和絵十二景』（1926）、吉田博の初期版画などの彫版も担当した。一方、1916年から黒田清輝の主宰する「葵橋洋画研究所」で本格的に洋画を学ぶようになり、1921年まで在籍。その間、1918年の第15回太平洋画会展に油彩画《静物》が入選し、皇后宮職買上げとなった。また、この洋画研究を活かした自画・自刻・自摺による木版画も、正確な時期は不明であるが、遅くとも1924年頃までには始めている。その後、文部省の委嘱を受け、1926年から1929年にかけて欧米（アメリカ・カナダ・メキシコ・イギリス・フランス・ドイツ・ベルギーなど）の版画事情を調査。訪問先の全米芸術団体ボヘミアンクラブ（サンフランシスコ）・カリフォルニア大学・シカゴ美術大学などでは個展を開催し、木版画も指導した。帰国後の1930年からは、欧米各地での取材したスケッチを元に、自画・自刻・自摺による木版画の「世界百景」シリーズに着手。また、同年の『線』創刊号（日本木版画協会 1930.7）の表紙・裏表紙の版刻を担当し、自画・自刻の《独唱》を発表した。1931年「日本版画協会」の結成に創立会員として参加。同年の第1回展に《世界百景ノ内「ホノルル」》《世界百景ノ内「ニューヨーク」》など

7点を出品。以後、第2～5回展（1932～1936）・「日本現代版画とその源流展」（1934 パリ）・「日本現代版画展」（1936～1937 サンフランシスコなど欧米9都市を巡回）に「世界百景」シリーズの作品を発表。その間、1932年のシカゴ国際版画展・パリ国際版画展に出品。1932年と1934年には「山岸主計世界百景版画展」（銀座・三越）を開催した。1937年「世界百景」シリーズ完成。1938年の第7回日本版画協会展には、「世界百景」に続くシリーズである「日本百景」のうち《阿寒国立公園摩周湖》《岡山鳥城》《伊那駒ヶ岳》と協会企画の「新日本百景第一期作品五十景の内」として《奈良》を出品。また同じ頃、「東亜百景」シリーズにも着手し、1939年から1943年にかけて5次にわたって従軍画家として中国・台湾などを取材。1940年に「山岸主計東亜風物画展」（10.22～26 名古屋・丸善）、1941年には「山岸主計東亜風景版画展」（11.4～9 上野・松坂屋）を開催したが、「日本百景」シリーズ、「東亜百景」シリーズはともに未完に終わった。なお、この頃の彫師の仕事としては、1934年から翌年にかけてのポール・ジャクレ『世界風俗版画集 第一輯』（私家版 10点）、1935年の石川寅治『裸女十種』（私家版 10点）などがある。1943年版画奉公会会員。1945年5月の空襲で麹町にあったアトリエを焼失。戦後は、1947年に神奈川県藤沢市に移住。1950年「藤沢市美術家協会」創立に参加し、翌年の第1回展に出品。1956年からは公募展となったが審査員も務めた。また、1958年頃より「仏像」シリーズ・「花と壺」シリーズの版画を制作している。1983年には単身で長野県伊那市へ移り、翌1984（昭和59）年3月2日同地で逝去。作品の多くは、伊那市・藤沢市に収蔵されている。【文献】『山岸主計展』図録（長野県伊那文化会館 1991）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

山岸嘉雄（やまぎし・よしお）

長野県上高井郡須坂町（現・須坂市）に生まれる。長野県師範学校一部1年に在学中、同校生徒による版画同人誌『樹水』第3号（1941）に木版画《お寺》を発表する。1945年9月同校を卒業。1950年当時は長野市の城山小学校に勤務。戦後は須坂市立中学校の教師の傍ら油彩画を描き、1965年に第18回示現会展で示現会賞を受賞し、会員となる。1971年には改組第3回日展に入選した。1992年には上高井郡高山村教育長に就任しており、『信濃教育』（1992.4）に「教師生活で思うこと」を寄稿している。【文献】『樹水』3 / 『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）／山岸嘉雄「教師生活で思うこと」『信濃教育』（1992.4）／ネット検索（加治）

山口悦三（やまぐち・えつぞう）

1924（大正13）年の詩と版画社第1回展（10.15～20 京都・丸山病院 主催：詩と版画社）に木版画《春》《自像》《F氏の印象》を出品。また、『詩と版画』第8輯（1924.11）に《F氏の印象》を発表。同誌の「作品印象語」には、「I〔石井鶴三〕此の人は面白いですね。／O〔恩地孝四郎〕F〔藤森静雄〕の顔を知ってるだけその夢に見たFの顔だと云ふのが一番面白い。／I 自像などはいいですね」などとの評がある。また、第11輯（1925.5）の「投稿版画」に木版画《水浴》《燈下》を応募したが、平塚運一に「山口悦三氏「水浴」はあまりに雑然としてゐる。それかと云つて、雑然とした浴場の感じもなく、少し固い感じがする。或ひは、これを灰色で刷つたらもう少しよかつ

たかもしれない。「燈下」は無難であるが、少し黒い部分が多すぎはしないか」（平塚「投稿版画に就いて」『詩と版画』11）と評されている。【文献】『詩と版画社第一回展覧会目録』（1924）／『詩と版画』8（1924.11）・11（1925.5）／『創作版画誌の系譜』（三木）

山口華楊（やまぐち・かよう） 1899～1984

1899（明治32）年10月3日京都市中京区油小路錦上の友禪彩色家の二男に生まれる。本名は米次郎。1912年西村五雲に師事。1916年京都市立絵画専門学校別科に入学。1921年研究科に進級後、修了。在学中の1916年、第10回文展に《日午》で初入選。以後、文展・帝展に出品する。第8回帝展（1927）の《鹿》、第9回展（1928）の《猿》で連続特選となり、翌年推薦となる。1927年五雲塾は「晨朝社」と改称するが、1938年五雲の死去に伴い解散。再結成した「晨朝社」を主宰する。1916年から市立絵画専門学校に勤務し、1942年教授となり1949年まで勤める。戦後は日展に出品し、第10回展（1954）に《黒豹》、第11回展（1955）に《仔馬》を出品。円山四条派の流れを汲みながら近代的で静謐な花鳥画・動物画を得意とした、京都画壇の重鎮である。1971年日本芸術院会員、1981年文化勲章受章。版画には1931～33年の『新進花鳥画集』に《春蘭》《紅葉の蔭》（マリア書房 多色木版）、1940年の『現代名家素描集 第七輯 山口華楊自選 動物篇』（芸艸堂 多色木版2点）、戦後は《秋晴》（モモセ版 多色木版）《バラ》（リトグラフ）等がある。1984（昭和59）年3月16日京都市で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和60年版（東京国立文化財研究所 1895）／『山田書店古書目録』11・81（森）

山口 源（やまぐち・げん） 1896～1976

1896（明治29）年10月23日静岡県富士郡田子浦柳島に生まれる。本名は源吾。幼児期に東京に移住。慶應幼稚舎に入学するも、父が事業に失敗したため1906年母の実家に移り、1910年静岡県飯田村の飯田尋常小学校を卒業。1914年両親が台北に移住したため、静岡と台北を往来し、翌年から定住。青年期を台湾で過ごす病気がちであったという。1918年療養のため関仔嶺温泉に逗留。温泉宿の女主人の甥で、来遊中の藤森静雄を知る。1921年西田天香の精神修養道場「一灯園」に入る。1923年再上京。「一灯園」の関東支部で同人として働き、奉仕活動の中で恩地孝四郎を知り、藤森にも再会する（一説には「関東大震災直後の瓦礫の中で藤森に偶然再会。その後、藤森に恩地を紹介されて入門した」とする）。その後、「一灯園」同人生活の傍ら版画制作を行い、1928（昭和3）年の第8回日本創作版画協会展に《女兒》が初入選。翌年の第9回展にも《静物（試作）》《花》が入選。また、1929年の『風』再刊第4号（1929.9）に《金魚》、1930年の『線』創刊号（日本木版画協会 1930.7）に《驟雨》を発表。翌1931年には版画集『上野・浅草 1』（日本木版画協会 未見）を刊行か。1935年頃、竹久夢二の息子虹之助と暮らす、このことが恩地の勘気に触れて破門となり、四国・九州などを旅絵師として遍歴。1939年に許され、関野準一郎とともに恩地宅で開かれた研究会「一木会」の世話人を務め、1940年の第9回日本版画協会展に《秋の山》《死火山》が入選。その後、第13回展（1944）まで連続して出品。その間、1943年の第12回展で会員に推挙された。また、1941年の第16回国画会展にも《燭下の花》が初入選。その後、第19回展（1944）まで連続し

て出品。その間、1942年の第17回展の《石垣苺》《鏡のある静物》で褒状を受け、1943年の第18回展で会友に推挙された。さらに、1941年の第4回新文展に《向日葵と玉蜀黍》、翌年の第5回展に《くずとかほちや》が入選した。1944年『一木集Ⅰ』（1944.9）に《蛭》を発表。同年結婚し、夫人が歯科医院を開業していた静岡県沼津市江浦に転居。以後同地に居住。戦後は、1945年12月に恩地を中心に外国人向けの版画集『東京回顧図会』（富岳出版社）がまとめられたが、《芝増上寺》《明治神宮》を発表。また、翌年再開された「一木会」に参加し、版画集『一木集』（Ⅱ～Ⅵ 1946.5～1950.12）などに作品を発表した。公募展へは、1946年の第14回日本版画協会展に《かいう》《いか》、第20回国画会展に《炎暑景物》《春日抄》、第2回日展に《温室の屋根》を出品。これらの作品は戦前からの具象表現であったが、1947年頃からは「物体版画」（マルチブロック）による抽象表現に転じ、日本版画協会展・国画会展を中心に、恩地の流れを汲む抽象木版を晩年まで発表。その間、1949年の第23回国画会展で版画部会員に推挙された。また、第1～3回東京国際版画ビエンナーレ展（1957・1960・1962）、第2～4回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ（旧ユーゴスラヴィア 1957・1959・1961）、第1回グレンヘン色彩版画トリエンナーレ（スイス 1958）、第5・6回サンパウロ・トリエンナーレ（ブラジル 1959・1961）など数多くの国際展にも出品。1958年の第5回ルガノ国際版画ビエンナーレ（スイス）に出品した《能役者》でグランプリを受賞したほか、1957年の第2回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ出品の《芝生》で優秀賞、1958年の第1回グレンヘン色彩版画トリエンナーレ出品の《許容》で佳作賞などを受賞した。1963年イタリアのフィレンツェ素描アカデミーの名誉会員。また、地元では1948年の「静岡県版画協会」の結成に参加。1966年から会長、1972年に顧問となった。1976（昭和51）年7月15日静岡県沼津市で逝去。翌年の第45回日本版画協会展、第51回国画会展に遺作が展示された。その後、1983年に沼津市が「山口源賞」を制定。山口源の業績を顕彰し、版画を通して市民の芸術文化の向上をはかるために「山口源大賞」（1983～2015 隔年1名）と「山口源新人賞」（1983～ 毎年1～2名）を選定している。【文献】『静岡の美術Ⅷ 生誕100年 山口源回顧展』（静岡県立美術館 1998）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

山口紅果（やまぐち・こうか）

1925（大正14）年の『詩と版画』第11輯（1925.5）に木版画《水浴》（機械刷り）と短歌による連作《砂のしめり》（「月籠る四月の海ゆ渚邊の／砂のしめりに貝しろく見ゆ」など8首）を発表。「卓上果」にも随筆が掲載された。なお、短歌については「卓上果」の「投稿詩読後言」に恩地孝四郎の評がある。続く第12輯（1925.7）にも藤森静雄との思い出などを寄稿し、「卓上果」に掲載された。それによれば藤森の福岡県立嘉穂中学校教諭時代（1919～1922）に「友人のT氏」と版画の手ほどきを受けたようで、「酸漿のよやうに赤くなつたストーヴの傍で惨々ストーヴをいぢめぬきながら氏は片膝に所謂板つペラのスケッチ板を乗せながら足裏の棘でも抜いてゐる格構におつかぶさつてグイグイけずられる鑿はまるで燕のとぶ様に電気鋸の様にすさまじいものでした。二つ三つはつた頃に右手をはるかにさしのべて一眺しては板つペラを四本の指

でゴシゴシ押しこすつて（これは調子をみるための手段ださうで）は鼻の穴が一寸ふくれたかと思ふとコケラ（木片）が牛蒡でもそぐ様にとびちるのでした。尤も柏と小鳥だの大すきの尻尾の長い黒猫などは二日が、りの特に彫ることをエンヂヨーイされたものでしたつけ。／冬の間はかうして毎日より毎日の傍が大工小屋みたやうになりました私もT氏も早速弟子入りして三人が三人で盛にけずつたものでした。エキスリプリスといふラテン語を覚えたのも其頃です。／その頃習字用の簀にくるまれた時代付の鑿は全く忘れられないものです。そのうちには三角刀も一本ありましたが一度も使はれなかつた様です。今頃もあの簀のなかに小口を針金で巻いた鑿が光つて居るでせう。黒塗の円い板ツ片（八寸盆の板でせうか）を心にした薄いバレンも思ひ出されます」などと記されていて、あまり知られていない藤森の嘉穂中学校教諭時代の動向を知る証言としても貴重である。因みに第11輯・第12輯の編輯者は藤森であった。なお、投稿時の住所は福岡県嘉穂郡飯塚町か。【文献】『詩と版画』11（1925.5）・12（1925.7）（三木）

山口孝二郎（やまぐち・こうじろう）

1940年に朝鮮釜山在住の清永完治によって発行された版画誌『朱美之集』（1940～1942 5冊）の第1冊（1940.5）に《面（習作）》を発表。当時「釜山府大新町463-2」に在住。【文献】「第1回会員〔名簿〕」『朱美通信』1（1940.5）／『創作版画誌の系譜』（加治）

山口 進（やまぐち・すすむ） 1897～1983

1897（明治30）年1月25日長野県上伊那郡東箕輪村長岡に生まれる。1909年東箕輪農工補習学校を卒業。1912年長野通信講習所を卒業し、郵便局に勤務。同年初めての木版画《子守唄》を制作。1920年画家を志し、上京。葵橋洋画研究所に入り、黒田清輝らの指導を受ける。絵を始めるには遅いスタートであったため、油彩画以外に水彩画・版画・漫画・俳画などにも積極的に取り組み、公募展に出品したという。版画は、独学で始めたもので、1923年の第5回日本創作版画協会展に木版画《動物園の午後》が入選。翌年も京都で開かれた「詩と版画社」第1回展（京都・丸山医院）に《変電所》《水中に遊ぶ女等》《浜辺》、第6回日本創作版画協会展に木版画《発電所》《浜辺》《刈込》を出品。1925・26年は日本創作版画展が開かれなかったが、1925年のロサンゼルス国際版画展（3.1～19 ロサンゼルス美術館）に《刈込》《海浜》を出品。ちなみに、同年12月から第一高等学校寮務掛として勤務するようになった。その後、1927年の第7回日本創作版画協会展で会友に、1928年の第8回展で会員となり、1929年の第9回展まで出品。その間、1928年には新しく版画室を設けた第6回春陽会展に《湖上の冬》《鯉織り作り》を出品。以後、第13回展（1935）まで毎回出品したが、第13回展は版画と油彩画の出品だった。また、創作版画誌にも積極的に参加し、1924年の『HANGA』第3輯（神戸・版画の家 1924.9）に《八月の午後》、『詩と版画』第8輯（詩と版画社 1924.11）に《水と娘等》を発表。その後も『HANGA』第6輯・第9・10輯合併号・第11輯・第12輯（1925.6～1927.10）、『詩と版画』第9・10輯（創作版画倶楽部 1925.1・3）、『風』再刊第3・4号（『風』発行所 1929.6・9）、『きつつき』創刊号・第2号（1930.1・9）、『線』創刊号（日本木版画協会 1930.7）などに作品を発表した。一方、油彩画も中央美術展（1923～1925・1927・1929）・

光風会展（1925）・太平洋画会展（1925・1926）などに入選。特に第7・9・10回帝展（1926・1928・1929）に入選したことは特筆される。また水彩画も光風会展（1924）・日本水彩画会展（1924・1925・1928・1929）などに入選。1929年には日本水彩画会の会員になっているが、この頃から次第に作品発表の中心を版画に置くようになっていく。1931年「日本版画協会」の創立に参加。同年の第1回展に《言問橋》《鶏頭》《御嶽にて》を出品。以後、1944年の第13回展まで毎回出品したほか、1934年の「日本現代版画とその源流展（パリ装飾美術館）」、1936年の「日本の古版画と現代版画展」（ジュネーブ市博物館）、1936年から翌年かけて実施された「日本現代版画展」（欧米9都市を巡回）、1942年に上海で開かれた「日本版画協会展」（中日文化協会虹口事務所）などにも出品。また、常務理事（1935～1944）を務め、事務所（1939・1940）を担当するなど、幹部会員として会の活動を支えた。またその間、1931年の第1回新興版画会展（6.21～25 新宿・三越）に《七面鳥》、1932年の第10回オリンピック芸術競技展（ロサンゼルス美術館）に《東宮賜杯を持てる織田幹雄氏像》、1936年の第11回オリンピック芸術競技展（ベルリン）に《鉄槌投》《女子砲丸投》、1940年の紀元2600年奉祝美術展に《夕映》、1941年の仏印巡回現代日本画展（ハノイ・ハイフォン・ユエ・サイゴンを巡回）に《富士山》、1942年の第5回新文展に《登攀》を出品。また、『版芸術』第3・5・9・21号（白と黒社 1932.6～1933.12）、『櫟』第3・4・5・8・9・10輯（須坂・信濃創作版画研究会 1934.7～1936.7）、『飛白』第1巻第1号～第4・5・6〔合併〕号（静岡・飛白社 1934.7～1936.8）、『白と黒』〔第3次〕第1年2・4号（白と黒社 1937.4、1937.6）などにも作品を発表している。1943年5月日本版画奉公会理事。1945年5月の東京空襲に遭い、自宅を焼失。第一高等学校を辞め、郷里の東箕輪村に帰る。戦後は同地に住み、版画制作を再開。展覧会は、1946年の第1回日展と第14回日本版画協会展に《雲海》を出品したが、その後しばらく中断があり、日展は第8・12・13回展（1952・1956・1957）に出品。日本版画協会展へは第23回展（1955）から再び出品するようになったが、その間、1950年のシカゴでの国際版画展、1952年のサンフランシスコなどでの国際版画展とフィンランド主要都市での交換版画展、1953年のユーゴスラビアでの現代版画交換展、1955年全米巡回現代日本版画展など海外で開催された展覧会へ出品を重ね、また1955・1960・1961年にはアメリカ人の作家や版画愛好家を伊那に迎え版画を指導した。1951年から1953年まで長野県立箕輪高等学校、1953年から1957年まで長野県立高遠高等学校で美術の講師として勤務。1954年には岡谷市で開かれた「第1回全国版画教育研究会」（岡谷・田中小学校）に講師として参加した。1972年日本版画協会名誉会員。1979年『山口進版画集』（形象社）を刊行。同年回顧展「山口進版画展」（長野・ながの東急百貨店など長野県内6会場を巡回）を開催。1983（昭和58）年11月25日長野県上伊那郡箕輪町で逝去。翌年の第52回日本版画協会展に遺作が特別陳列された。【文献】『山口進版画集』（形象社 1979）／『没後20周年 版画家 山口進展—伊那谷から世界を目ざして—』図録（長野県伊那文化会館 2003）／『川上澄生 生誕110周年 創作版画の流れのなかで 山口進と川上澄生』展図録（鹿沼市立川上澄生美術館 2005）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究

所 2006) / 桑原規子・春原史寛編「海外における日本現代版画展出品目録一覧」『日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—』(平成17~19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 2008) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

山口政治 (やまぐち・せいじ)

新潟で佐藤重義・富樫寅平らによって発行された文芸・美術などの芸術同人誌『土塊』(1927~1929 全7号)の第7号(1929.1)に『裸婦』を発表。【文献】『佐藤哲三の時代』展図録(新潟県立万代島美術館編「佐藤哲三の時代」展実行委員会 2008) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

山口草平 (やまぐち・そうへい) 1882~1961

日本画家、挿絵画家としても知られる。1882(明治15)年10月18日大阪市に生まれる。本名は光四郎(みつしろう)。苗字は和田であったが、後に山口家の養子となる。号は草平(「艸平」とも標記)。京都府立第一中学校を出て上京し、飯田橋の國學院に学ぶ(國學院専門部卒との説あり)。大阪に戻り一時期ではあるが、中川蘆月の指導を受ける。のちに独学で日本画錬成に努める。1914年第8回文展に『稽古と楽屋』出品し初入選。翌年第9回文展に『芝居前』入選。1917年には再興第4回院展では『後堂』初入選し院友。1918年日本美術院第4回試作展の『徳兵衛』で奨励賞受賞。関東大震災に遭い大阪に帰る。1928年国画創作協会解散後、展覧会出品から遠ざかって、挿絵画家として専念。1961(昭和36)年7月8日に大阪の四天王寺病院で逝去。芝居をテーマにした絵画で知られる。版画としては役者舞台姿を描いた「中村鴈治郎紙絵姿」(大綿版・1941頃か)が知られる。挿絵画家としては、大佛次郎「水戸黄門」(『朝日新聞』1934)を代表作とする例もある。1921年頃の『サンデー毎日』から戦後の1955年頃まで活動。郷土研究誌『上方』(1931~)の扉絵、本文挿絵を常連ではないが時折担当した(例:13号挿絵『鴈治郎の紙屋治兵衛』・28号扉『新町九軒吉田屋表口』など)。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)(岩切)

山口泰三 (やまぐち・たいぞう)

1928(昭和3)年、山本鼎選による第15回『アトリエ』誌上〔版画〕展覧会(1928.10)で、木版多色摺『静物』が3等に選ばれる。当時、愛知県知多郡大高小学校に勤務。【文献】『アトリエ』5-10(1928.10)(樋口)

山口孝行 (やまぐち・たかゆき) 1903~1982

1903(明治36)年佐賀市に生まれる。1924(大正13)年佐賀県師範学校を卒業。佐賀県師範学校附属小学校教員などの傍ら、1924年に山口亮一が設立した「佐賀洋画研究所」に入門。1928(昭和3)年より佐賀美術協会会員となって同展に出品を続ける。また、1936年8月14・15日、佐賀県師範学校に於いて西田武雄を講師に招いた山口亮一主催のエッチング講習会に参加。『エッチング』47号(1936.9)に「佐賀のエッチング」を寄稿、「エッチングの技法、それは私としては六、七年も前美術学校で田邊先生に手ほどきを受けたのであったが、其の後温習の努力を欠ぎ真に自己の興味として内心湧出するまでには自励しなかった」と。また、翌1937年7月27日にも再度西田武雄を迎えてのエッチング講習会に参加、その時

に制作したと思われるエッチング《〔室内の静物〕》が『エッチング』58号(1937.8)に紹介されている。戦後も佐賀美術協会展に出品を続け、1959年には「山口孝行絵画教室」を開設し後進の指導にあたる。1962年からは創元展にも出品。1968佐賀美術協会理事、事務局長を務め、1981年創元会会員となる。山口亮一の生誕100年を記念して刊行された『山口亮一画集』(山口亮一顕彰会 1981)では顕彰会会長として尽力する。1982(昭和57)年佐賀県で逝去。翌1983年に同協会に「山口孝行賞」が設けられた。【文献】『エッチング』47・58・59 / 『山口亮一画集』(山口亮一顕彰会 1981) / 『第80回佐賀美術協会展記念誌1997』(佐賀美術協会 1997) / 『佐賀美術協会の100年』(佐賀美術協会 2017)(樋口)

山口武雄 (やまぐち・たけお)

1932(昭和7)年の第2回日本版画協会展に木版画《婦》2点を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

山口 澹 (やまぐち・たん)

1928(昭和3)年、守口基隆主宰のモリス社が創刊した版画誌『NEVELON』の創刊号(1928.4)に『猫』《或る「個」の影像》『風景』《無題》の4点の木版画を、第2号(1928.8)に『まりつく僧』《水夫》《試作》の3点の木版画を発表した。作風は内面の表現への志向性を感じさせるものである。この他の作品、活動については詳細不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(滝沢)

山口八九子 (やまぐち・はちくし) 1890~1933

1890(明治23)年10月11日京都市に生まれる。本名は「直信」。1905年京都市立美術工芸学校へ入学、同校で教鞭をとった中川重麗(四明)の感化で、俳句に親しんでゆく。1909年京都市立絵画専門学校に進み、1912年卒業。卒業制作は『短日の山』(第17回新古美術展に出品)。20代の八九子は、俳誌『ホトトギス』『懸葵』『層雲』『海紅』等に俳句や表紙絵・挿絵・カットなどを寄せるようになる。1917年東京の俳画堂で個展。1919年畦田亀代を追って長崎大村へ行く。翌年亀代と結婚、長男直春誕生、長崎図書館で個展。1921年長女悦子誕生、第1回日本南画院展に『雲仙湯煙』出品、第3回帝展に『浜木綿』初入選。1922年平和祈念東京博覧会に『暮るゝ天橋』出品、第4回帝展に『牡丹』入選、第2回日本南画院展に『秋山片照』出品。1923年橋本閔雪らと中国旅行、日本美術展に『枇杷』出品。1924年鞍馬寺本堂襖絵(牡丹図)を描く、第3回日本南画院展に『山陰二題』『牡丹図』を出品、『雲雀を揚ぐる夕』が第5回帝展に入選。1925年長女悦子没。八九子も肋膜炎により病臥、秋に和歌山へ行き、療養生活。1927年和歌山より京都に戻る、第6回日本南画院に『春霜』等5点を出品、第8回帝展に『海苔を採る』入選。1928年荒神橋病院入院、第7回日本南画院展に『桂川渡御』『秋溪』を出品。1929年、一年ぶりに退院、第8回日本南画院展に『冬山入斧』出品、大阪三越で「山口八九子氏絵画展覧会」、父直胤没。1930年父の一周忌に『松南遺集』を刊行。第9回日本南画院展に『夏意七趣』出品、第11回帝展に『月夜』入選。1931年母浅江没。1932年病床にてこの年をすごす。1933(昭和8)年10月2日京都で死去。木版画としては、『鞍馬図』(『鞍馬図記』1921所収)、『俳画講座』(第1~4巻 1927~28)掲載の口絵・表紙、あるいは正月に作られる『宝船』のよう

な作例もあるが、佐々木文具店で販売された便箋・封筒・団扇などが代表的なもので、それらは、死後の1934年刊行の『八九子作画 京名所』『三樹洞落葉集』にまとめられた。版木の一部は早稲田大学會津八一記念博物館が収蔵。【文献】『山口八九子作品集』（山口八九子作品集刊行会 2008）／『山口八九子の画境』（早稲田大学會津八一記念博物館 2002）／『山口八九子の画境Ⅱ』（早稲田大学會津八一記念博物館 2005）／『山口八九子の画境Ⅲ』（早稲田大学會津八一記念博物館 2016）／「山口八九子資料」Ⅰ～Ⅹ『早稲田大学會津八一記念博物館紀要』4～12（2003～2011）（丹尾）

山口久吉（やまぐち・ひさよし）

山口久吉は、神戸で創刊された版画誌『HANGA』（1924～1930）の主宰者として知られる。山口の名が最初に確認できるのは、1922（大正11）年に開かれた神戸弦月画会主催の「創作版画展」（223～26 神戸・三宮三〇九番館 後援：日本創作版画協会）である。「神戸弦月画会」は「弦月画会」「弦月会」とも呼ばれ、1916年頃に関西学院の高等学部学生が設立した洋画団体であるが、彼らが主催したこの展覧会は神戸で開かれた最初の本格的な版画展である。その案内状に賛助者として「版画愛蔵家山口久吉」の名があり、旭正秀も同展を紹介する記事（「神戸に於ける創作版画展覧会」『版画』1-3）の中で「日本唯一の創作版画蒐集家として有名な神戸山口久吉氏」と紹介している。また、出品者の中に「山口ひさよし」の名で木版画《なんてん》を出品している者がいるが、山口本人と考え、名前の読みに採用した。翌1923年2月には、自宅に「日本創作版画院」（事務所：神戸市中山手通4丁目18ノ2）を設立。「創作版画を直接的又は間接に保護奨励するを目的」とし、展覧会の開催、画集の発行、作品頒布などを計画。顧問は戸張孤雁と山本鼎、賛助員は石井鶴三・織田一磨・恩地孝四郎ら13名であった。最初の事業としては、版画集に収録する作品を公募したようである（『日本創作版画院 趣旨書』『みづゑ』218・220）。1924年2月「日本創作版画院」の名を「HANGA NO IE」「版画の家」と改称し、創作版画集『HANGA』を創刊。1930年の第16輯（1930.4）まで刊行したが、恩地孝四郎・川上澄生・川西英ら71名の版画家（学童2名を含む）が作品（図版を含む）を寄せて他、版画家で教育家でもあった武田新太郎の協力を得て『児童創作版画集』（1925.6）の刊行や、平塚運一・川西英・川上澄生・小泉癸巳男・平川清蔵・深沢素一・森山収治らの作品頒布会を主宰し、創作版画の普及の場として大きな役割を果たした。またその間、版画応援者としての功績により、1927年には「日本創作版画協会」の特別会員に推挙されている。なお、創設時の「版画の家」の住所は、「神戸市中山手通4丁目18ノ2」であったが、1928年12月25日に「神戸市〔須磨区〕山下町3丁目1」（渡辺進宛転居通知状、現・神戸市長田区山下町3丁目）に転居。『HANGA』第15輯（1930.3）・第16輯（1930.4）は同地で刊行した。同誌は第16輯で終わったが、「版画の家」の名はその後も使われている。現在確認できるのは1937年の年賀状（渡辺進宛年賀状 1937.1.1 消印）までであるが、同年秋には手持ちの額縁100余点を日本版画協会に寄贈している（『日本版画協会々報』23）、「版画の家」としての活動はこの頃終了たのかもしれない。なお、山口の学歴などは不明であるが、1936年の『日本紳士録』（『明治大正昭和神戸人名録』所収）に「山口久吉 山口（名）出資役

員」とある。この「山口合名会社」（1909.12 創立 神戸市栄町3丁目24）は、1927年頃に山口の父と推定される「山口嘉吉」（神戸で運輸業を営み、1910年頃神戸駅逓合資会社の無限責任社員、1924年頃は山口運輸株式会社を経営）が代表役員を務めていた会社で、有価証券や土地建物の所有売買などを営んでいたようである。1939年の「日本版画協会会員名簿」（『日本版画協会々報』31）に「客員」として名前が掲載されているが、その後の消息は不明。神戸市須磨区山下町3丁目の自宅も1945年3月の神戸大空襲で焼失した。【文献】『創作版画展覧会目録』（神戸弦月画会 1922）／旭正秀「神戸に於ける創作版画展覧会」『版画』1-3（1922.4）／『みづゑ』218・220（1923.4・6）／『日本版画協会々報』23・31／『明治大正昭和神戸人名録』（日本図書センター 1989）／『創作版画誌の系譜』（三木）

山口蓬春（やまぐち・ほうしゅん） 1893～1971

1893（明治26）年10月15日北海道松前郡松城町（現・松前郡松前町字松城）に生れる。本名は三郎。日本銀行に勤務していた父親の転勤に随い、札幌・仙台・東京と移転を重ねる。1909年大蔵商業学校に入学するが、1906年退学し赤坂溜池の白馬会洋画研究所に通う。1915年東京美術学校西洋画科に入学、同級に中村研一がいる。第3回二科展（1916）に《漁村の一部》、第4回二科展（1917）に《庭園初夏》が入選するも、1918年西洋画科を退学し、日本画科に再入学する。1923年に卒業。松岡映丘の主宰する「新興大和絵会」に参加し、定期展に出品。1924年「蓬春」の雅号を用い、第5回帝展に《秋二題》が初入選、以後帝展を中心に出品する。第6回展（1925）の《春苑春雨》、第7回展（1926）の《三熊野の那智の御山》、第8回展（1927）の《緑庭》と連続して特選となり、1928年第9回展で推薦、翌年審査員となる。1930年中川紀元・木村莊八・牧野虎雄・中村岳陵・山口蓬春、編集者の外狩素心庵・横田毅一郎等と美術研究会「六潮会」を結成し、1940年まで活動。1934年明治神宮絵画館壁画館に《岩倉大使欧米派遣之図》を描いている。1947年山形の疎開先から神奈川県葉山町に移転し、葉山が終の場所となる。日展を主に発表の場とし、各小品展に出品する。1950年日本芸術会会員、1965年文化勲章受章。復古大和絵調から洋風の近代感覚の溢れる作品を制作している。著書に『新日本画の技法』（美術出版社、1951）がある。版画には新興大和絵メンバーによる1927年の『日本新名所図会』に《奈良》《彦根》（新大和絵木版刊行会 多色木版）、1928年の大和絵木版画集『日本八景』に《別府温泉》（多色木版）、六潮会メンバーによる1936年の『六潮版画“風”』（銀座三味堂 多色木版）に《雪風》、1940年の『現代名家素描集 第一輯 山口蓬春自選 植物篇』（芸艸堂 多色木版5点）等がある。1971（昭和46）年5月31日神奈川県葉山の自宅で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和47年版（東京国立文化財研究所 1972）／デジタル版「山口蓬春年譜〔修訂版〕」（山口蓬春記念館 2007）（森）

山口亮一（やまぐち・りょういち） 1880～1967

1880（明治13）年8月10日旧鍋島藩士中野到明の二男として佐賀市に生まれる。本名は辰三。6歳の時に医師の山口亮橋の養子となり、亮一と改名。佐賀中学校4年の時に東京早稲田中学校に転校、長兄礼四郎が早稲田中学校と早稲田専門学校の教師だったことから礼四郎の家に寄宿する（礼四郎は後に早稲田中学校校長を務める）。

1903年同校を卒業するが、医学校への進学から絵画の道へと転じ、白馬会洋画研究所に学ぶ。1906年東京美術学校西洋画科に入学、岡田三郎助らの教えを受ける。在学中、1910年5月の第13回白馬会展に《秋の日》《カーネーション》等5点、10月の第4回文展に《わら家》が入選する。1911年同校を卒業し、佐賀に帰郷、制作と後進の指導にあたる。1913年、久米桂一郎・岡田三郎助・北島浅一・御厨純一ら在京の画家たちと「佐賀美術協会」を創設し、在郷の山口が初代会長となる。翌1914年に佐賀県における洋画・日本画・工芸等を含めた初めての総合美術展覧会「佐賀美術協会展」を開催（於県会議事堂）。1921年より1943年まで佐賀県師範学校で図画科教諭を務め、また1922年からは佐賀高等女学校、1924年からは佐賀高校でも兼任講師として美術を指導する。傍ら、第7～9・12回文展（1912～1918）、第6回光風会展（1918）、第2・4・7回帝展（1920・22・26）、文展招待展（1936）、第1～4回新文展（1937～1941 無鑑査）などに出品。1924年に「佐賀洋画研究所」を設立し、後進を指導。戦後は1946年に「佐賀美術工芸研究所」を開設し、陶磁器美術なども指導した。1962年佐賀県文化功労賞を受賞。1967（昭和42）年10月31日佐賀市で逝去。因みに、姉磯千代は久米桂一郎と結婚、叔父に洋画家の小代為重がいる。

山口がエッチングの制作を始めた経緯は不明だが、1928年には《[女の]顔》《[和服の]女》《夫婦樟》の3点を制作している。また、1935年9月頃に佐賀県師範学校のために西田武雄から研究所製のエッチングプレス機を購入。翌1936年8月14・15日、山口の主催で西田武雄を迎えたエッチング講習会を佐賀県師範学校で開催し、山口の他に田中宗一・古川誠逸・山口孝行・今泉與八・牟田口貞夫の6名が受講している。『エッチング』47号（1936.9）にその時の講習会について田中宗一（当時佐賀中学校勤務）が「一年生の感謝」と題して寄稿、「近く師範の山口〔亮一〕先生からプレス機が手に入った、こんなのが出来たから一つやってみないかと勧められてさえ延び延びになってしまった。所が頗る突然であり偶然である絶好の機会に巡り合つてあの講習。ただ感激と感謝で一杯である」。この時に制作したと思われる山口のエッチング《[夫婦樟]》（1928年制作の作品とほぼ同じ図柄）が48号（1936.10）に図版で紹介され、翌1937年7月27日にも再び西田武雄を迎えたエッチング講習会で制作したと思われる《瓦焼》が59号（1937.9）に図版掲載されている。また、1940年12月開催の第1回日本エッチング展覧会（10～13 銀座・資生堂画廊 主催：日本エッチング作家協会）に《風景》の出品がある。【文献】『エッチング』36・47・48・58・59・96 / 『山口亮一画集』（山口亮一顕彰会 1981） / 『第80回佐賀美術協会展記念誌1997』（佐賀美術協会 1997） / 「山口亮一旧邸パンフレット」（佐賀市地域文化財データベース 佐賀の歴史・文化お宝帳） / 『佐賀美術協会の100年』（佐賀美術協会 2017） / 『山口亮一』（佐賀県立美術館 2017）（樋口）

山口蓼洲（やまぐち・りょうしゅう） 1886頃～1966

1886（明治19）頃、京都に生まれる。本名は古沢慶三。大蔵流狂言師の家系に生まれ、本願寺に狂言方としてつかえた山口家の養子となる。狂言は十世・十一世茂山千五郎に師事し、画を谷口香嶠に師事する。能画・狂言画を得意とした。『能具大観』4冊（芸艸堂 1914 木版102図）、『狂言百番』2冊（芸艸堂 1922）、『狂言画大観』百種之内 10輯（版元〔林某〕或は〔板画会〕 1927

木版60図）、『能狂言服飾文様』（板画会 1929～1930 木版50図）などを刊行。第1回京都市美術展覧会（1935）に《松風村雨（二曲一双）》を出品している。1966（昭和41）年京都市で逝去。【文献】『山田書店新収目録』42（2000秋） / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（樋口）